

教授就任にあたって



歯科総合診療部教授就任にあたって

新潟大学医歯学総合病院
歯科総合診療部 魚島 勝美

平成16年1月1日付で新潟大学医歯学総合病院
歯科総合診療部教授を拝命いたしました魚島と申
します。就任以来早くも1年以上が経過してしま
いましたが、この紙面をお借りして、ご挨拶をさ
せていただきたく存じます。先ずは私が認識して
いる私の仕事についてご紹介させて下さい。

1. 卒前臨床実習

新潟大学の歯学部は恵まれています。学生の臨
床実習にご協力いただける患者様がとても多いか
らです。この恵まれた環境を生かすには教員のや
る気、学生のやる気、システムが非常に重要です。
私一人では何ともならないことは自明ですが、で
きる限りのことはやろうと思っています。アメリ
カ留学時代、臨床実習のインストラクターとして
も給料を得ていました。アメリカの学生から学ぶ
べきところは多くありますので、それらもできる
だけ学生諸君に伝えたいと思っています。

2. 卒後臨床研修

ご存知のように平成18年度から歯科医師臨床研
修が必修化されます。今までは卒業して国家試験
に合格すればすぐに独立して歯科診療が行えたの
ですが、必修化後は1年間の研修を受けないと単
独で臨床に携わることができません。50年に一度
といわれる制度の大改革を迎え、いかに有効な研
修プログラムを提供できるかが重要です。頑張り
ましょう。また、ご協力をお願い致します。

3. FD (教員研修)

東京の某大学歯学部で教員をしていた時、臨床
実習のインストラクターをしていました。実はこ

の時、その大学には8年ぶり戻ったのですが、そ
こで感じたこと。色々な意味で改善すべきことに
関しても8年前と何も変わっていない。臨床実習
の若手インストラクターの実力が低下している。
そんなことでした。そこで、学生教育の充実に先
立って先ず成すべきことは教員の研修だと提案し
ました。今のように教員研修が盛んに行われるよ
うになる直前のことでした。

4. 研究

大学院の時のテーマはデンタルインプラントで
した。4年間、解剖学教室でひたすら標本と向き
合いながら、寝ても覚めてもインプラントについ
て考えていました。その後、3年間のアメリカ留
学で遺伝子レベルの研究のあり方を勉強しまし
た。今、専門は補綴学（歯が無いところに歯を補
うことを専門とする学問分野）ですが、基礎研究
の手法を取り入れた臨床家としての研究のあり方
を考えています。

5. 歯科治療

大学院修了直後、歯科口腔外科に3年間在籍し
ました。入院患者様を担当しつつ、毎日20人くら
いの外来診療をしていました。いかに治療のレベ
ルを落とさないかを考えていました。歯科治療は
心身ともに大変です。必死で患者様のために診療
をする歯科医師がもっと報われることが、患者様
の利益につながると考えています。あの時の忙し
さが原点です。

6. 英語教育

歯科医師は特殊な職業です。その特殊性ゆえ、

歯科医師には英語の能力が必須だと考えています。以前に在籍していた歯学部では国際交流室というところに配属され、英語を必要とする業務を行っていました。英語の壁は依然として感じますが、今後はその壁がどんどん薄く、低くなっていくことを希望しています。

7. SCP (Student Clinician Program)

かつて歯学部の学生が研究活動に携わることの重要性について論文を書いたことがあります。今でもそう思います。すべての人に当てはまるわけではありませんが、やはりそこには大きな可能性があると思っています。

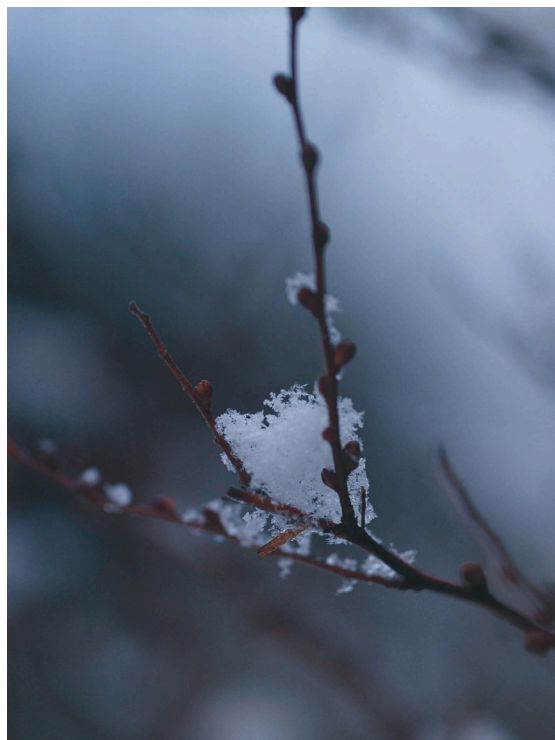
8. 住居

官舎は相変わらず極寒ですが身体が寒冷地仕様になりましたのでもう大丈夫です。

世の中はすべての事柄で差別化が進んでいるよ

うに見えます。日本の歯学部は皆標準から下に外れないように頑張ってきたように思います。しかし、これからは上に外れることを目指さなければいけません。今までの新大歯学部の伝統を崩さず、横並びから抜け出すチャンス逃さぬよう、今以上に新大出身の歯医者素晴らしいと言われるよう、皆様のご協力をお願い致します。

以上、私が考えておりますことを勝手に羅列させていただきました。「こんな輩だ」といったところをご理解いただければ幸いです。3年前、東京から新潟に赴任して歯学部ニュースにご挨拶を掲載していただいた時はクラウンブリッジの助教授でした。相変わらず居場所がころころ変わって落ち着きませんが、今後も微力ながら新潟大学歯学部発展のために努力して参りたいと存じます。どうかよろしくご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。





歯科矯正学分野教授就任にあたって

新潟大学医歯学系摂食環境制御学講座 齋藤 功
歯科矯正学分野

平成16年10月1日付で、花田晃治名誉教授の後任として歯科矯正学分野（平成17年4月より咬合制御学分野から名称変更予定）を担当させていただくことになりました。初代教授の福原達郎先生と二代目の花田先生が築きあげてこられた医局の伝統を守りながら、より一層発展させられるよう務めていきたいと考えておりますのでどうぞよろしくをお願いいたします。

私は、昭和59年3月に14期生として新潟大学歯学部を卒業しました。新潟大学歯学部は1期生から14期生まで定員が40名でしたので、学生時代は歯学部最後の40人という強い仲間意識をもって運動会、歯学祭、各種スポーツ大会に意気込んで参加していました。また、生まれが埼玉、高校が浦和であったことから、中学、高校とサッカーに親しみ、大学でもサッカー部に所属して活動してきました。歯学部サッカー部には、昔からなぜか多くの教授が後援会に所属され、私の学生時代も故草刈部長（当時歯科補綴学第二講座教授）、大橋後援会会長（前口腔外科学第二講座教授）、花田監督（前歯科矯正学講座教授）、島田先生（前口腔生理学講座教授）などそうそうたるメンバーがいっぱい、現在も河野教授、野田教授、川島教授、高木教授がサッカー部をバックアップして下さり、今年から私も監督を務めることになりました。しかし言うまでもなく、部活動への支援は十分にするつもりですが、サッカー部員の学業成績を大目に見ることは昔も今もありません（笑）。念のため。

歯学部卒業後は大学院に進みました。小学校から大学卒業までの18年間、教師や教官の先生方から教えていただいたものを忠実に理解、実践していれば支障がなかったことにやや物足りなさを感じ

ていたことから、是非自分でテーマを見つけて何かに取り組みたい、そう考えて大学院生として歯科矯正学教室に入局しました。「ようしやってやるぞ」と意気込んで入局したものの、実際にテーマを見つけることは想像以上に大変でした。矯正科では、大学院生といえども診療に従事し、今も昔も研究と診療を両立させることを基本としています。大学院生にとっては非常に大変なことです。臨床の観点から研究テーマを探す努力ができること、また、私の場合臨床も研究もやりたくて入局したことから、非常に恵まれた環境にありました。幸い、故小林茂夫教授（旧口腔解剖学第二講座）ご指導の下、かなりの試行錯誤はあったものの「矯正力に対する縫合部の反応」というテーマを見つけて組織学的に研究し、大学院を修了することができました。

こんな風に書くと、まじめで研究熱心な大学院生と映るかもしれませんが、しかし、矯正科に入れていただいたもう一つの理由は（もしかしたらこちらの理由のほうが大きかったかもしれませんが）、よく学び、よく遊ぶ教室であること、そして花田教授のバイタリティーに憧れたことでしたので、昼は診療、夜は研究、そして夜中は友人と飲んで語る、そんな贅沢で充実した？ 大学院生活を送っていたように思います。

その後、16年間教員として矯正科にお世話になり、「歯の移動に伴う歯根膜神経の動態」や「痛覚関連ペプチドの骨改造現象への関与」などについて基礎的に研究し、臨床的には「開咬合や偏位咬合の成長に伴う変化や治療方法」について興味を持ち取り組んできました。これらの研究は、基礎系分野ならびに臨床系他分野からのご支援の下で成り立ってきましたので、今後も時代の要求に即

したトランスレーショナルリサーチを推進していきたいように今まで以上に他分野との連携を強くしていきたいと考えています。また、教育に関しては、学生が自主的に学び思考できるように、新潟大学では全国の歯学部、歯科大学に先駆けて問題解決型学習(いわゆるPBL)などを段階的に取り入れ始めています。私も平成16年度にファシリテーターとしてPBLの実践に参画させていただき、意欲的で優れた学生さんの多いことを改めて発見しうれしく感じた次第です。今後も、確かな知識と技術ならびに豊かな人間性を兼ね備えた歯科医師を輩出するべくお役に立ちたいと思っています。

さらに診療面についてみると、矯正科では開設

以来、口腔外科のご協力を得ながら唇顎口蓋裂症例および顎変形症例に対する治療に積極的に取り組んできました。今後とも、医歯学総合病院歯科が唇顎口蓋裂治療あるいは顎変形症治療の拠点病院として一層充実発展するように矯正科としての役割を果たしていきたいと考えています。

私は、小さいころから歯科医師になりたいと考え、幸いその仕事に従事することができました。そして、このような立場を与えていただいた今、質の高い歯科医療の提供をとおして患者さんに幸せを与えられる歯科医師を数多く輩出し、結果的に歯科界あるいは歯科医師のステータス向上が図れるよう尽力するつもりでおりますので、ご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

